

積荷作業の日雇い人夫、ヤミ煙草を製造し、ソ連軍相手に立ち売りしたり、朝鮮アメを仕入れ、手製の手押車での街頭販売などその日暮らしの生活が続いた。その間、わずかばかりの身のまわりの品まで幾度か没収されたが、なんとか食をつなぎ、身を保っていくことができた。

翌二十一年八月下旬、内地引揚げが始まったが、私は使役として一人残留することになった。私を除いた家族四人は、リュックサックに食料等を詰めこみハルビン市を出発した。引揚げ途中は他の皆さん方と同様で、引揚げ列車の貨車内では毎日毎晩、不安と不眠の連続、あっちこっちへ停車したり、そのうえ、下車させられては徒歩行進。身体の弱ってきた人達は、落伍しないようにと背負っている荷物を放棄しつつ歩く。あげくのはてには野宿となり、ナマ米をかじり、雨水でのどをうるおし、川での行水など、眠れぬ夜を過ごしながら南下し、錦西の収容所に集結。コロ島港から出港する引揚げ船を待ち乗船、博多港上陸まで一か月余かかり、義父の郷里福島県へと向かったということだった。

一方、残留した私は難民収容所へ行き、病弱者の引揚

げ準備を整え、九月初めに出發、担架隊員として病弱者の担架輸送にあたることになった。貨車は棺桶を積み、続出する死亡者の処置をしながらの引揚げである。汽車不通地では、荷物を背負って病人を担架で運ぶ徒歩行進。野宿も病弱者を抱えての不安な夜を明かし、体力に減退を感じつつも頑張りながら南下した。錦西の収容所に集結後、コロ島港から乗船した。なにしろ病弱者を抱えた船であるから、毎日のように水葬が行われ、また、コレラ発生で毎日検便のうえ沖へ隔離される状態であった。ハルビン市を出発してから一か月半、ぶじに担架隊として病弱者の輸送任務をまっとうし、博多港に上陸。先に帰国した家族がいる福島県へと向かったのである。

## 開拓団員のために私を捨てて

福島県 塩 沢 直 利

私は、農家の四男として生まれ、小学校卒業後、店の番頭見習いとして入店した。そんなわけで農業の経験な

どいっさいなかった。私は兵隊から帰り、当時の国家の事情を考え、食糧は配給制度であり、あの広大な農地を十分開拓して、食糧増産に精を出してみたいと考えた。

昭和十八年四月五日、満州国開拓団員として入植のため、満州国黒龍江省甘南県第九次呉山開拓団へ入植した。大東亜戦争を勝ち抜くためにも思っけて開拓に行くことに對して、親戚家族の反対を無理やりはねのけて移住したのである。

移住し二か年頑張った。その後、開拓水利事務所の工事現場に勤務していた。戦争は、ますます激化を極め、各職場では勝利を祈りつつもちろん一丸となって頑張ったが、残念ながらいかに敗戦になってしまった。私たちは途方にくれ、頼るところもなく、ただひたすら引揚げの日を待つのみだった。ところが、地区住民との関係が悪化したのは予想以上だった。毎日のように匪賊の襲来があり、手あたりしだいに金品、衣類、保有食糧などすっかり取上げられてしまった。もう生活するのに明日からの食糧はなく、飢えに苦しめられる日々がどんどん重なってしまった。そうすると栄養失調になり、病人

が続出し、死者が出始め、毎日毎日その始末をするのがもうつらくてたいへんな苦労だった。

私達の三百六十人の団員が一人一人減っていくのである。悲しみがどんどん増幅され、ひもじさが増大するのは、地獄のありさまだった。食糧を現地人から調達した粟やこりゃん、道具がなくなってしまったので、食べられるうよにするのは難儀したものだ。私は調達した食糧をわけ与え、少しでも人さまのためにと毎日毎日頭を下げ、団員のために食糧の買い出しと、死体の始末をすることをやった。いつか故郷に帰る日を夢見て、おたがい助けあいながら頑張り続けた。うわさでは公務関係者はぶじ引揚げたと聞いた。同じ国民でありながら一般民と公務員でこんなに差別があることを無念に感じた。しかし、私たちは苦勞を共にし生きることを最大の目的にし、共に頑張っけて引揚げの日を待っていた。引揚げのニュースが入り、生存者一同肩をたたきあい喜びあったのは、今でも忘れることはない強烈な思い出になっている。

昭和二十一年九月二十九日開拓団を離れチチハルまで

病人、子ども、老人と共に一週間がかりでようやく着いたときには、何人もの人が死亡し、他の生存者は乞食同様だった。ただただ故郷に帰れる喜びと気力で頑張っただけだった。残念なのは、開拓団の自分の家で凍死したり、匪賊に殺されたり、栄養失調のため死亡したり、病死した方々にわれわれが生きて帰れたことを申しわけなく思っている。

心から御冥福を祈ってやまないものである。

## 満州の建設と召集と

東京都 原 豊 重

昭和十八年三月、ジャムス四一二部隊の軍命令で大林組は北満チブリ・ポツリ飛行場建設にあたり、私は転勤する。ポツリより自動車で三時間もかかる山奥です。団山という部落です。工事は飛行機の格納庫をつくるのです。満人の報国隊を遣う。十九年正月、報国隊に配給品を受取りに行く途中、自動車のエンジンが凍る。吹雪で

見とおしがつかず、部落に宿泊することにして、翌日部落より品物を受取り持ち帰る。満人の宿舎をまわり、配給品を事務所まで取りにこいと呼びかける。満人服と酒、豚肉を配給する。われら日本人には樽酒が配給され、内地を思い出しました。あとで樽を見たら、酒がこおりつき、残りの樽に一升ほど残っており、酒が凍る寒さなのです。現場では、鉄筋不足で輸送がとまり、北満は工事中止です。

昭和二十年七月、すでに戦争は激しくなっていた。関東軍命令で、大林組は南満に引揚げろとのこと。家族は鞍山、私は錦州に行けとの電報を受けて、家族と奉天の駅で別れる。私の荷物は錦州大林組出張所に送る。錦州に着くと、鞍山に戻れとの電報があり、すぐ列車に乗り、鞍山に着く。現場は、立山。家族いっしょに現場に乗りこむ。友だちの加藤君に召集令状がきたので、引きつき終わった後、私にも令状がきた。北満依蘭の兵事課に出頭せよとの令状である。

家族の見送りを受け、出発する。列車に乗り、ハルビン駅に着き、埠頭にきて見ると船が修理中で直りしだい